愛知教育大学研究報告，54（人文・社会科学編），pp. 127～135, March, 2005

S．フォール『アナキズム百科事典』と M．ペルティエ

～20世紀初頭フランスにおけるアナキズムとフェミニズムの接点をめぐって～

見崎恵子
Keiko MISAKI

社会科教育講座

はじめに

19世紀末から20世紀初頭のいわゆる第一波フェミニズムのなかで，数少ないフランスのサフラジェット（戦闘的女性参政権運動家）の一人，マドレーヌ・ペルティエ（Madeleine Pelletier 1874-1939）は，精神病院インターンとなった最初のフランス女性でもあり，またフリーメーソンとして，さらにフランス社会党員・フランス共産党員として政治活動に参加するなど，多様な活動に身を投じたフェミニストである。このようなペルティエの多面的な活動のうち，今回取り上げるのは，アナキズムとの関係である。

19世紀末～20世紀初頭のフランスにおいては，多様なアナキズムの潮流が数多くの新聞・雑誌，著作物を発行しており，ペルティエはそれらの紙誌に多くの寄稿文を掲載しているだけでなく，みずからの著作のいくつかをアナキスト出版社から出している。

しかしながら，フランス・アナキズムの研究においてペルティエはもとより，フェミニストの存在はまったく取り上げられてこなかった。日本における19世紀から20世紀初頭のフランス・アナキズムの研究は，J．プルードンなど著名な思想家研究か，あるいはアナルコ・サンディカリズムの研究としてなされてきただけである[1]。フランスにおいてさえまとまった研究は皆無で，古典ともいわれるジャン・メトゥロンの『フランス・アナキズム運動の歴史（1880-1914）』でも女性として注目されるのは，パリ・コミューンの女性闘士ルイーズ・ミシェル（Louise Michel）以外ほとんど見られない[2]。フェミニズム視点からの研究では，プルードンにおけるミソジニー（女性嫌悪）が論じられているだけである[3]。

晩年，「物事が理解できるようになった歳から，ずっとフェミニストであった」とみずから確言するペルティエが，なぜアナキストたちと交わったのか。その主張はアナキズムの主張とどのような点で一致し，また一致しないのか。20世紀初頭フランスのフェミニズムとアナキズムとはどのような関係にあったのか。

本論は，こうした考察を行うスタート点として，当時のアナキズム思潮の集大成ともいえる『アナキズム百科事典』（1934年出版）を取り上げ，そこでの女性及び女性解放の議論を分析しようとするものである。

なおペルティエの生涯や参政権要求などはすでに別稿で論じているのでそれらを参照されたい[4]。

1．『アナキズム百科事典』とペルティエの執筆

まずはじめに『アナキズム百科事典』（以下『百科事典』と略称する。）について簡単に見ておこう。

この『百科事典』は，全4巻，2段組で総頁2,893頁に及ぶ大部の著作である。監修に当たったアナキストS．フォール（Sébastien Faure 1858-1942）は，約10年をかけてこの出版を実現した[5]。

フォールは，サン・テティエンヌの富裕な絹商人の家に生まれ育ったが，ボルドーでのアナキストとの交流を経てパリにのぼり，1890年代には活動家・論客として名を知られるようになる。1895年にはルイーズ・ミシェルと新聞『ル・リベルテール *Le Libertaire*』を発刊する。さらに1904年にはアナキスト教育の実践のために自ら学校を設立し運営した。第一次世界大戦中は，アナキストを含む左翼勢力が戦争に協力・参加するなかで反戦活動を行い，逮捕・投獄されている。1920年代のアナキストの組織化をめぐる対立では，「総合 synthèse」派の中心人物として「綱領 plate-form」派と争っている[6]。

フォールが『百科事典』の構想を抱いたのは，1920年代に入ってのことであるが，この経緯をR．ルヴァンは次のように書いている。

「彼には自分のきわめて個人的な活動が突如脆弱で移ろいやすいものに思われた。フォールは時に扇動家，時に宣伝家，時に実践家として活動してきた。日々の活動に追われ，フォールは息の長いプロジェクトを避けていつも緊急課題に対応しようとしてきた。こうしたすべての努力の結果，何が残るのか。いまやフォールはアナキズム運動における深い持続的な足跡を残す必要を感じるようになった。1925年1月，67歳になったばかりのフォールは，パリに友人たちを集め，次世代の活動家たちのための遺産であり共同作業の成果と

なるであろう百科事典の刊行に関する詳細なプロジェクトを提示した[7]」。

このようにして始まった『百科事典』編纂の企画は，壮大なものであった。1934年に出版にこぎつけた全4巻は，その第一部にすぎなかったのである。「序」でフォールは全体像を次のようにまとめている[8]。

第一部：アナキズムの哲学的理論的側面に関する百科事典

第二部：アナキズム思想・行動の歴史，各国編

第三部：アナキズム運動に属する主要な活動家の生涯と著作（アルファベット順）

第四部：人間解放に寄与したアナキスト以外の哲学者・文学者・科学者たちの生涯と著作（アルファベット順）

第五部：アナキズムのプロパガンダに関わる本・パンフ・新聞等の一覧（国・言語毎）

『百科事典』として出版された第一部には，企画全体との関係からか，事項索引も執筆者一覧もないが，項目数約1,650，執筆者は名前が明記されている者だけで100名を超えている[9]。

編纂の基本方針として，社会のさまざまな分野における現実と思潮・運動を広く紹介することとともに，「アナキズムを構成するすべての潮流，すべてのテーゼを公平に提示する[10]」ことを挙げており，実際執筆者には，亡命ロシア人のP．アルシーノフ（Piotr Arshinov）やヴォリーン（Voline），イタリアの著名なアナキストE．マラテスタ（E. Malatesta），ベルギーのH．デイ（Hem Day），フランスにおける個人主義的アナキズムの代表ともいえるE．アルマン（Eugène Armand），正統派共産主義者のA．デュノワ（Amédée Dunois）など多彩な顔ぶれが並ぶ。

同様に，項目として選ばれた用語についての記述も多面的なものになっている。例えば，アナキズムのキータームの一つである「個人・個人主義」については，981頁から1009頁まで，一般論から教育の立場での論述まで，また個人主義的アナキストの立場から共産主義のそれまで，実に10の小項目にわたって8人のアナキストが執筆している。

このようなアナキズム思潮を広く体系的に集成しようとするフォールの試みに，ペルティエも積極的に参加した。後で触れるように，ペルティエとアナキストたちの関係は必ずしも常に良好だったわけではない。しかしながら，フェミニズムの論客であり，政治や科学・医学など幅広い分野で活躍しつつアナキズム新聞に多くの記事を掲載してきたペルティエは，やはり『百科事典』編纂にとって必要不可欠な人物であった。

ペルティエの執筆項目は，哲学・心理学分野で「交霊術」「施設隔離」「宗教」「真理」「心理学」「正義」「世俗化」「哲学」「天才」「道徳」「理性」，政治分析としては「革命」「共産党」「軍国主義」「政党」「祖国」「党のボルシェヴィキ化」「マルクス主義」「秘密結社」，フェミニズムの主題では「家族」「出生率」「乳児殺し」「買売春」「フェミニズム」「不妊症」「母性」など，全部で31項目である。

明記された100名を超える執筆者のなかで女性はわずか5人，ペルティエとM．ヴェルネ（Madeleine Vernet），J．ユンベール（Jeanne Humbert），S．レヴィ（Suzanne Lévy），S．ザイコウスカ（Sophie Zaikowska）である。しかし，後者2人はわずか1項目，J．ユンベールは夫と連名での執筆，ヴェルネの場合でも3項目であり，ペルティエがいかに重要な位置を占めていたかが理解できよう。ペルティエ自身もそれを自覚していたのであろう，1920年代末には多くの新聞に寄稿するのを停止して，『百科事典』に精力を集中したと言われている[11]。

2．ペルティエとアナキズムの関わり

ペルティエとアナキストの出会いは，ペルティエが小学校を終えたばかりの少女時代に始まる。

後に書かれた『回想録』のなかで，ペルティエは「13歳の頃，夜になると両親の家を出て政治集会に参加したものだ。アスティエ・ドゥ・ヴァルセル（Astié de Valsayre）のグループとのつきあいで，アナキストたちと大いに議論することになった[12]」と述べ，また友人 Arria Ly 宛ての手紙では「15・6歳の頃，私はアナキストグループのもとへ出入りしていた[13]」と書いている。このアナキストたちとの関係は，ペルティエが「バカロレアの準備の為に政治集会に参加するのを止め」るまで続いた。貧しさゆえに勉学の機会を予め奪われていたペルティエが，知的な刺激を受け，キャリアと政治の世界をめざすチャンスをつくりだしたのは，アナキズムとの接触だったのである。

この少女時代のペルティエについての証言が，アナキスト新聞『種まき人』（*Le Semeur de Normandie*，1925年末以降は *Le Semeur contre tous les tyrans* と名称を変える）62号（1926年2月24日）掲載の記事の中に見つかった[14]。同紙に載ったペルティエの主張に懸念を示した投稿の一部である。

「マドレーヌちゃんのことはよく覚えています。オレル・ホールで同志P．マルティネの熱情的な講演や同志ボドゥローの感動的な談話に，かわいく疑り深い様子で耳を傾けていましたね。本当に遠くまで来たものです。でも，私は，絶対間違いない療法などを信じるほど，ペルティエさんがすっかりその職業に染まっていないはずだと考えたいですね。」

ペルティエがバカロレアに挑戦したのは1896年夏であるから，20歳頃までにはアナキスト・グループと距離をおくようになったと思われる。その後，大学で医学を学んで医師となり，1905年頃にはフランス社会党員，女性参政権運動家として世に出るようになる。し

かし，アナキストとの接触を完全に絶ったわけではなかったようで，1904年に入団したフリーメーソンでは，ネオ・マルサス主義者を含むアナキストたちと交流し，また自らL．ミシェルをロッジに迎え入れている(15)。さらに第一次世界大戦が近づく1913年頃からは，すでに触れたS．フォールの『ル・リベルテール』紙に継続的に寄稿するようになる。

ペルティエが革命後のロシアへ非合法の旅行を試み帰国した1921年頃に，ボルシェヴィキの評価をめぐる対立からペルティエとフォールらアナキストとの関係は一旦決裂するが，20年代半ばには再びアナキスト新聞に寄稿するようになり，先に触れた『種まき人』や『さらに遠くへ *Plus Loin*』『アナルシー *L'Anarchie*』などに多くの署名記事を書いている。『百科事典』への執筆は，こうした寄稿をベースになされたのである。

3．「百科事典」におけるフェミニズムの位置

ペルティエの『百科事典』における執筆項目は，すでに述べたように他分野にわたっているが，なによりもフェミニストとしてのペルティエが，アナキズムとどのような接点をもったのかを考察するために，ここでは『百科事典』において女性問題・女性解放がどのように位置づけられ論じられているかを，全体的に捉えることから始めよう。

まず項目として「フェミニズム」が立てられ，ペルティエとJ．マレスタン（Jean Marestan）の二人が書いていることに注目したい。マレスタンはフォールに協力して『ル・リベルテール』紙の編集に携わった医師で，ネオ・マルサス主義の立場から性に関する著作も多く，『百科事典』でも「性教育」「純潔」「独身」「離婚」などセクシュアリティや家族に関わる多くの項目を執筆している。

女性解放についても一定まとまった記述がなされている。独立した項目とはなっていないが，「個人の自由」と「解放」の項目なかにそれぞれ「女性の解放」「女性の自由」が小項目として立てられているのである。前者を執筆しているのはCGTの活動家で一時フランス共産党に属したG．バスチァン（George Bastien）であり，後者の「女性の自由」はマルセイユのアナキストで文化面での項目を多く担当しているE．ロタン（Edouard Rothen）の執筆になる。

この「フェミニズム」「女性の解放」「女性の自由」に見られる論点は，他の項目によって補足される。女性の隷属を支える制度としての「婚姻」「家族」は，それぞれ三人の執筆者，「婚姻」ではJ．マレスタン，E．アルマン，M．ピエロー（Marc Pierrot），「家族」ではペルティエとJ．マレスタン，F．スタッケルベール（Frédéric Stackelberg）が，両項目ともに7頁にわたって書いている。女性の身体・セクシュアリティに関しては，ペルティエによる「出生率」「乳児殺し」の他，ネオマルサス主義の医師F．エロシュ（Fernand Elosu）による「中絶」，ペルティエ，E．アルマン，M．ピエローの3人が執筆する「買売春」があり，フェミニズムの重要な論点である「母」と「母性」では前者がM．ヴェルネによって，後者がペルティエとM．ドゥヴァルデー（Manuel Devaldès）によって書かれている。関連して「愛」や「ネオ・マルサス主義」「セクシュアリティ」などがかなり多くの頁を割いて論じられている。

このような家族や女性の身体・セクシュアリティに関する記述の多さと比べると，女性の政治的権利・法的地位や女性労働・家事労働の問題についての議論は少なく，もちろん項目立てもない。この点でのアナキズムの限界を，予め指摘しておくことができよう。

では，以上のような項目・論点において，アナキストたちの議論は具体的にどのようであり，フェミニスト・ペルティエの主張はその中でどのように位置付くのか，次節でそれをみていくことにする。

（次節では『百科事典』からの引用については註を避け，その頁のみを必要に応じて執筆者名とともに記す。）

4．フェミニズムの論点とアナキストの主張

(1) 「フェミニズム」と権利要求をめぐって

今日であれば，フェミニズムを国民国家の法制度を前提とする女性の権利平等要求と定義してこと足れりとすることはありえない。しかし20世紀初頭，一方で女性の無権利状態がひどく，他方で「ジェンダー」論も国民国家論も未だ存在しない状況の中で，アナキストが「フェミニズムとは，人類社会において，女性に男性と平等な諸権利を広く認めさせることを目的とする教義」（J．マレスタン，804頁）と定義することに何ら驚くべきことはない。しかもマレスタンは，「この教義は公平の基本的精神に適合する」（804頁）として支持し，当時一般的に提示された差別の論拠（女性の身体的・精神的劣性）を詳細に論駁している。

「女性の解放」「女性の自由」を執筆したG．セバスチァンとE．ロタンもまた，女性に対する支配と抑圧に強く抗議する。「フランスでは『人権』は女性のものではない。女性は政治的には存在しない。……社会的にも，子どもを産み，過酷な家族責任を担い，愛玩動物ないし贅沢なペットとして役立つ以外，女性は存在しないものになっている」（ロタン，1249頁）。このような隷属状態に置かれた女性たちが，異議申し立てをし，解放を要求することは当然のことであるとアナキストたちは肯定的に受け止めている。

しかし，バスチァンが「いわゆるフェミニストの運動」と呼んで，政治的権利・法制度上の平等権を要求する運動を切り離し，それが「真の」解放を阻害するものであると主張するとき，フェミニスト・ペルティ

エとの対立が，さらには男性アナキストの間の微妙な意見の違いが表面化する。

ペルティエは「フェミニズムには諸派がある」として，「政治的諸権利を除外して，公民権だけを求める」「臆病な」(805頁)フェミニズムを批判する一方，「普通選挙の価値を認めず，女性の政治的要求に無関心」(806頁)なアナキストらへの批判を強める。フェミニズムがまとまった運動として生起し展開するために，フランス革命とその後の民主主義の発展が果たした役割を，ペルティエは高く評価するからである。別稿[16]で述べたように，ペルティエは，政治的権利の獲得の，その先にしか，女性の社会的「個人」としての確立はありえないと考えていた。アナキストのいう未来社会でない「現在の社会において，正義と平等を奪われた女性たちが，男性と同じ権利を要求するのは当然のこと」(806頁) だった。

アナキズムにおける投票権の無意味さの主張は，広く知られるところであるが，バスチァンも「男性の投票権の経験からすでに結論は出ているではないか。普通選挙が労働者と雇い主，借家人と家主の平等をもたらすとでも言うのか」と書いている。無意味どころか，さらに女性参政権運動は「真の解放運動を脇に逸らし，……議会主義の泥沼に引きずり込む」(672頁) ものとして厳しく断罪されている。「議会・議会主義・議員」の項でも，選挙人になることは個人の決定権を他に委ること，自ら支配者に対して「抑圧の権利を付与する」(1970頁) ものであると見なされている。

しかし，このような否定的見解を，すべてのアナキストが前面に打ち出しているわけではない。「市長のところに投票権をもらいに来た男性市民に，医学上の適格証明や識字能力についての証明を要求することはないのに，なぜ有能な女性労働者，女性教員や女医……らが排除されねばならないのか」と問い，排除の背景に「選挙における競争相手の増加や，不愉快な投票結果を恐れる気持ちが働いている」(805頁) と書くマレスタンには，少なくとも女性参政権運動を頭から否定する姿勢は見られない。

女性の労働権の主張についても，参政権と同様の対立や食い違いが見られる。『百科事典』の「労働」「プロレタリアート」の項目，あるいは「個人の自由」の項目で「女性の自由」に先立って置かれている「労働の自由」において述べられているように，アナキストにとって「賃労働が存在する限り，労働の自由はない」のであり，労働者に与えられる自由は「仕事が見つからず餓死する以外に他の方法がない自由」(1248頁)なのである。それゆえに賃労働への平等な参加を要求することなど，女性解放にとって何の意味もないことだとみなされたのである。

それに対して，「女性も男性と同じように働いて生きる権利をもつ」とするペルティエは，もちろんこのようなアナキストの主張を受容しない。現実の労働の過酷さを認めつつも，働くことがもたらすある意味での「自由」を強調する。部分的であれ「自立した生活の喜びを女性労働者たちは理解し始めており」，「たとえそのために長時間仕事場にいなければならないとしても」(806頁) 自分の手で稼ぐことの楽しさは動かし難いと述べている。後述するように，ペルティエはこの労働による経済的自立なしに，女性の男性への性的隷属を断ち切ることはできないと考えていた。

一方，参政権に関してはフェミニズムの要求を否定したセバスチァンが，この労働市場への女性の進出については肯定的に書いている。「いたる所で女性は自らの力で生活しようとし，家庭の隷従からの解放をめざしている。労働することで，必要に迫られながら女性たちは自らの利害を論じる習慣を身につける。……自由で，経済関係において男性と平等であること，女性の解放はそこにある」(673頁)。セバスチァンのこの主張は，彼がサンディカリストとして活動し，共産主義的アナキズムの潮流に属していたことと関連している。「女性は労働市場で男性の競争相手になるが，諸要求の実現をはかろうと努力するなかで，次第に男性たちと連合するようになる」(673頁) として，女性が労働運動の隊列に加わることの重要性を力説しているが，女性の権利や平等の問題として労働をとらえているわけではない。

このようにフェミニズムのとらえ方や受容の仕方は，アナキスト個人あるいは諸派によって微妙に，ときには大きく異なっている。そしてこの一枚岩でない雑多な主張を集めるアナキズムであったからこそ，ペルティエのようなフェミニストが活躍する余地を残したものと考えられる。しかし同時に，「包括的フェミニズム」を主張するペルティエに，他には見いだせない議論と思索の場を提供したのもアナキズムであった。家族制度に対する徹底した批判や，母性，身体・セクシュアリティの問題化がそれである。

(2) 家族制度をめぐって

19世紀後半の進化論的家族史研究を経て，さらに私有財産と女性支配と家族の起源を結びつけたマルクス主義的家族論を手にしたのちの，20世紀初頭のアナキストの家族観は，もはやプルードン的な独立生産者の家父長制家族を賞賛するものではありえなかった。しかも賃労働が支配する時代にあって，労働者家族における家庭生活の暗部（アルコール依存，暴力，家族放棄など）が社会問題化しているとき，ブルジョワ家族のモラルを乗り越えるものとして，安易に労働者家族を理想化することもできなかった[17]。そして実際にアナキストたちの家族論は，権威秩序に支配され抑圧される女性（と子ども）からの告発に力点を置くものになっている。

「子どもが女性の重い負担になっているのに，働いて生計を立てることのできない女性は，……一人の男性を選ぶことで，家族も社会も提供してくれない物質的な保障を手に入れようとせざるを得ない」。これが女性にとっての結婚であり，そうして始まる家庭生活は女性を「常に屈辱的で，しばしば苦痛に満ちた奴隷状態」(1413頁) に置いていると，J．マレスタンは「結婚」の項目に記している。このような見方は，他の項目をみても，かなり多くのアナキストに共有されている。

他方で，セバスチァンのように，マルクス主義の家族論に即した見解をあっさり出しているものもある。セバスチァンにおいては，女性は「家族を通じて相続される私有財産の奴隷であり，誤った社会組織ゆえに課される家事の奴隷」(673頁) であると明言され，ゆえに経済的な革命が最重視されている。

「家族」の項目を執筆するペルティエも，ある部分同様な進化論的家族論に立って，「家事の社会化」による女性解放を主張するが，しかし女性の抑圧・支配を私有財産にのみ結びつけ，階級闘争の中に女性解放問題を解消しようとする潮流には決してくみしない。極貧の労働者の環境を身をもって経験したペルティエにとって，階級を超えて家族は経済的にも心身の面でも女性を抑圧する制度であった。確かに「現状の社会組織において，家族は小さな子どもにとって不可欠なものであり，大人もまた悲惨さからの保護を家族に見いだす」ことをペルティエは認めるが，それゆえにまた次のように言い切るのである。「すべての保護者が抑圧者であるように，家族もまた抑圧するものである」(780頁)。

結婚せずに生きること，家族を離れて生きることができない仕組みの中で，保護・監督の名による強制・脅迫，暴力を受容するかたちで「女らしさ」やセクシュアリティが形成される。ペルティエが生涯嫌悪し続けたのは，そのようにして形成される「奴隷根性」，奴隷のセクシュアリティであった。

家族・結婚制度を「性奴隷」の制度化と見る点で，ペルティエがアナキストの間で孤立することはなかったと思われる。後述するように，アナキスト，とくに個人主義的アナキストは，「資本主義社会が唯一認める合法的な性愛」形式である結婚の欺瞞性を暴き，ユニオン・リーブル，さらには「自由恋愛」を提唱し，また実践しようとしていたからである。性的奴隷制の上に成り立つ社会及び人の再生産を廃止すること，すなわち「家族の廃止」を提唱するペルティエは，アナキストになじみの次の言葉で論述を終えている。

「未来の社会の細胞は，家族ではなくて個人である。細胞という言い方自体が，そこに依存関係が含まれているので，相応しくないだろう。……個人が社会のためにつくられるのではなく，社会は個人の幸福のためにつくられる」(783頁)。

家族の解体をペルティエほど明確な形で主張するアナキストは『百科事典』を見る限り見られないが，国家によって制度化された家族・結婚は，国家の消滅とともに消滅するという点で，反対するアナキストはいなかったであろう。

(3) 母性・産む身体をめぐって

家族はしばしば「子どもの幸福・福祉」の名によって称揚される。しかし，ペルティエは「家族は子どもにとって良くない」(780頁) と言い切り，「幸福どころか，しばしば地獄である」(781頁) 家庭生活によって子どもは被害を受け，さらに悪弊（差別と抑圧，奴隷根性）を次世代へと継承するという。すでに「家族が子どもの教育にとって決して望ましくないことは理解され始めている」(「出生率」1762頁) のである。では子どもの養育を誰が担うのか。

アナキストがめざす理想の未来，権威秩序のない自律した個人の協同社会が実現されるためには，「奴隷根性」をもたない自律的次世代の育成が重要な課題であった。アナキストたちが教育を重視し，実際にS．フォールの例にあるように共同体的学校を運営したのもそのためである。そこから，教育のスタート地点に位置付く母子関係，母親の養育への関心が生まれる。

『百科事典』において「母」の項目を担当しているのはM．ヴェルネただ一人であり，その主張がアナキズムにおいて占める位置は明らかではない。そこには当時のフェミニストに根強い「母性主義」の強調が，ある意味極端なまでに展開されている。

「母性愛は神のごとく永遠のものであり，神と同じように持続する」もの，「それは唯一の愛，あらゆる愛と生の源泉である」(1511頁) と述べるヴェルネは，母性主義者が一般にそうであるように，母となることを平和，幸福，優しさ，献身などの「美徳」に結びつけ，そこに女性性の揺るぎない価値を見いだしている。女性の社会への貢献はここにしかない，「他の仕事は彼女なしでもなされうるが，母性の使命においては彼女の代わりはありえないのである」(1513頁) という。それゆえ「母性を社会化することなど不可能なこと」(1511頁) だと主張するのである。

アナキストのキー概念である「個人性」は，ヴェルネにおいては「男性と同じく個人としてとらえられた女性は，エゴイストであり快楽・享楽を追求するだけ」という言い方で，少なくとも女性については棄却される。ヴェルネは「処女，子を産まない女性は不完全な女性」であり，「自然の秩序においても社会秩序においても，母にならない女性はその存在理由をもたない」(1509頁) とまで言い切るのである。

男性アナキストたちの母性に関する言及が，このような「母性の使命」論や「母性称揚」の色彩を帯びて

いないことは興味深い。「自覚的母性」の項を担当したM．ドゥヴァルデーは，「理性と愛情にもとづく母性」の理想を，同じように利他主義，慈悲，他人の尊重，愛，正義などの観念と結びつけて論じているが，女性個人を母性に解消しようとはしていない。「女性は，当然ながら，男性や子どもと同じように個人性・人格への権利をもつ」とし，子どもを尊重することは，「子どもに命を与える女性の個人性が低く評価されたり，二義的なものとされたりすることを決して意味しない」（1417頁）と述べている。

直接的に「自覚的母性」を論じているわけではなく，むしろ優生思想に色濃く染まった「ネオ・マルサス主義」の項目においても，「女性の物的，精神的，個人的，社会的な自立」が強調されている。「恋愛の自由には，その大前提として母性の自由がある」とし，「自由に望み，自由に同意する母性への『権利』」（p. 1389）を要求している。

M．ドゥヴァルデーではさらに，「自覚的母性」の観念は，なによりも男性の変化を要請することが指摘されている。「女性が男性の快楽のために創造された奴隷などではないことを，そして女性が自らの個人性をもち，文化や快楽や幸福への権利をもつことを，すべての男性が知らなければならない」とし，「自覚的父性の観念に取り組むことなしに，自覚的母性を語ることはできない」（1472頁）と述べられている。

このようなアナキストたちの「自覚的母性」「ネオ・マルサス主義」の議論は，ペルティエだけでなくネリー・ルセルらのフェミニストをアナキズムに結びつけた。ペルティエは「母性本能は考えられているほど普遍的なものではない，……それをもたない女性もいる」と書き，環境によって母性愛の出現も異なるとした上で，社会の現状から見るなら「母性愛は贅沢品」（1469頁）と断定する。母性の賞賛の影で婚姻外でのそれは軽蔑の対象となり，「中絶の禁止」によって望まない母性が強制されるとき，追いつめられた女性は「乳児殺し」に手を染める（1015頁）。このような状況のもとで，女性解放にとって必要なのは「母性」によって女性の権利と地位向上をはかることではなく，望まない「母性」から解放されることだというのがペルティエの主張である。女性は母性を強制されてはならないという点で，多くのアナキストとペルティエは同意見であった。

さらに，「自覚的母性」の議論が「私の身体は私のもの」というラディカル・フェミニズムの主張を含んでいたことも，ペルティエをこの潮流に引きつけた要因だと思われる。「女性の自由」の中でE．ロタンが次のように書いて現状を批判いることは注目に値する。

「女性の身体は女性のものではなく，彼女が無知や偏見から『結婚』した男性のもの……彼女を虐待し，その行為の結果などお構いなしに立ち去る乱暴な男性のものなのである。さらに女性の身体は，種の再生産を要求する社会のものであり，かつ，選択による出産になんら保障を与えないまま，市民の増加を要求する国家のものなのである」（1249頁）。

女性が決定権をもつことは，男性から，社会から，国家から自分の身体を取り戻すことだとするこのようなロタンの議論は，後述するセクシュアリティに関するE．アルマンのそれとともに，「中絶の権利」を「身体への権利」として主張するペルティエのスタンスを支持するもののように思われる。とはいえ，「中絶」それ自体をどう考えるかという点では，アナキストの姿勢はきわめて「穏健」である。『百科事典』の「中絶」の項目が，この問題にある意味で命をかけた（中絶幇助を理由に逮捕監禁され，精神病院で死を迎えた）ペルティエに割り当てられなかったこと自体が，アナキストの「及び腰」を示唆するが，その内容はさらに男性アナキストの「他人事」感を露わにしている。

「中絶の権利，……それはアナキストにとって何の利益ももたらさない。アナキストは暴行を加えることも，誘惑することも，捨てることもないのだから。……中絶の権利を認めるとしても，この医学的介入が引き起こしうる危険を理解しているがゆえに，アナキストは決して伴侶をこのような目にあわせない」（202頁）。

このような根拠のない楽天主義に，唖然とするのはペルティエだけではなかったであろう。「自覚的母性」「女性の身体」「中絶」等をめぐるアナキストの議論において，その圧倒的多数を占める男性の語り出す地点は，女性たちのそれとは遠く隔たっている。同様のことが次に取り上げるセクシュアリティについても言えるにちがいない。

(4) セクシュアリティをめぐって

20世紀初頭において主流派フェミニズムのセクシュアリティ問題への関心が，「性の二重基準」のもとで拡大する買売春の廃止及びそれを通した男性のモラル化（性欲抑制）に焦点化したのに対して，アナキストたちは，「自由な個人」の基礎となる「自由な性」をうち立てようとした。その背景には，19世紀以来の性科学の発展及びフロイトの理論によって，セクシュアリティこそ人格の基礎だとする考え方が浸透し始めたことがあると考えられる。実際，『百科事典』の「性科学（セクソロジー）」の項目では，J．ユンベールが，フロイトやエリス，ヒルシュフェルトらの研究を紹介したあと，ついにフランスにおいても1931年，「性科学研究協会」が創設されたことを喜び，「男性と女性の性的解放が確実に両性の全的解放を準備するだろう」（2572頁）と結んでいる。

E．アルマン執筆の「セクシュアリズム」の項目は，個人主義的アナキストのセクシュアリティ観を典型的に示すものとなっている。彼らに対して，ブルジョワ・

モラリストだけでなく，社会主義あるいはマルクス主義からも「性中心主義者」のレッテル貼りがなされるなかで，アルマンは彼らの原則的立場を次のように述べている。「経済問題，宗教問題などがあるように，性の問題があるのであり，マルクス主義者でない私たちは，経済的変革だけで個人及び社会組織を社会的偏見から解放することはできないと考える。私たちは……歴史を経済状況だけが条件付けるものとはみなさない。歴史とは，様々な偏見や伝統，科学や無知を身に付けた諸個人がつくり出すものである」(2572頁）と。

アルマンが偏見や無知として批判するのは性を罪深いものとして否定する宗教的教義だけではない。性を合法的なカップルの間に閉じこめる結婚もまた告発される。「純潔は自然に反する行為」であり，性的な「感情も，記憶，思考……などと同様人間の器官の物理化学的な産物の一つであって，教育したり発展させたりすることができるもの」として性を科学化するとともに，現状での人為的固定的なカップリングは，「個人の自律の破壊者であり，たとえ良好な条件のもとであっても，一方が他方を犠牲にする」「性器や皮膚や感情に対する異常な独占」(2573頁）にすぎないと断罪する。そしてここで犠牲にされ独占されるのは，圧倒的に女性であり女性の身体であることも確認されている。

「アナキストの論理は，個人の身体がエゴに，私にのみ属することを求める。それは法にも，神にも教会にも，国家にも，社会にも，仲間集団にも属さない。私の身体は私のものである」(2573頁)。このように考えるならば，ここから構想されうる性的関係は，相互に個人性を尊重し排他性を求めない「恋愛仲間(camaraderie amoureuse)」でしかない。アルマンが提唱するのはこれである。この同志的友情と性愛をセットにした男女関係の創設こそ「革命」の名に値すると考えるのである。

このような性愛観をもつアルマンにとって，「結婚と買売春の間に本質的な違いはない。結婚は長期にわたる買売春であり，買売春は短期の結婚である」(2573頁)ことは自明のことである。「性の自由」の名で買売春を合理化しようとする意見に対してアルマンは，そこにあるのは支配・従属と独占でしかないと厳しく批判し，この買売春は結婚と同時に廃止されるべきだとする。

「買売春」の項目はペルティエを含む3人の執筆者が総数14頁にわたって書いているが，重点の置き方に差はあるものの，基本的なスタンスは共通である。すなわち，金銭と引き替えに性的身体を差し出さなければならないのは女性であり，「買売春の原因は，女性の道徳的社会的奴隷状態そのものにあり，それ以外に見いだすことはできない」(ペルティエ，2213頁)ということである。

アルマン及びM．ピエローにおいては，買売春取締りの偽善性が鋭く追求されている。どのような買売春規制でも，「取り締まりはただ女性だけを犠牲にしてなされる。……性病の蔓延の責任は女性だけに課され，買春した客には何一つ要求しない」(アルマン，2211頁)。「風紀警察が制度化されたのは……買売春を撲滅しようとするためではない。それはまっとうな男たち，すなわち酔いどれ男たちを娼婦の侮辱や脅しから保護するためであり」(ピエロー，2218頁)，「風紀警察の規制は，二重道徳のシステムを聖別するもの」(アルマン，2211頁）だと弾劾されている。

さらに，人々の娼婦に対する非難や軽蔑にはなんら根拠がないこともこの項目で強調されている。アルマンは，他の仕事に比べて「自分自身の人格をもてない」娼婦の悲惨さを指摘しつつも，「資本主義社会では，だれも娼婦を断罪する権利はない。……雇用主のために労働を強いられる賃金労働者も，……作品を販売するために，金を支払う人の好みに合わせてつくる芸術家も……，すべての者が多かれ少なかれ娼婦である」(2211-2頁）と書いている。侮蔑や非難の言葉は自らに返ってくるのである。

一方ペルティエにおいては，買売春の問題は単に性的身体の売買の問題ではない。それは経済的依存を基盤とする女性性全体の構築に関わる問題なのである。「女性のあらゆる教育が，買売春のしるしを帯びている」(2212頁)。女の子は，小さい頃からすでに他人に気に入られる術を身に付け，着飾り，贈り物を受けとることを学ぶ。こうして受け身で，性的身体を差し出すことで養われるしかない「女らしい女」がつくられる[18]。女らしい服装や振る舞いは娼婦の「媚態」と変わるところはなく，娼婦だけが「娼婦」なのではない。この点でのペルティエの主張は，次の「性の境界」の問題にも関わって，アナキストたちとペルティエが決して相容れなかった点である。

アナキストにおけるセクシュアリティに関する考え方はもちろん，アルマンのいう「恋愛仲間」あるいは自由恋愛に集約されるわけではない。結婚制度は否定しながらも，男女が持続的な愛情関係を維持し，家庭と呼べるような共同生活を営むことを良しとする者もいた。M．ピエローは「結婚」の項目で，このような持続的な「家族的結合」(ユニオン・リーブルと呼ばれる)を自由恋愛に対比させ，次のように述べる。「現代にあっては，自由恋愛は大抵相手を見捨てることでしかなく，女性の劣位につけこみ男性のエゴイズムを利するものにすぎない」(1414頁)。

ペルティエは，女性としてフェミニストとして，アルマンの「恋愛仲間」にもピエローのいう「ユニオン・リーブル」にも疑いの目を向けた。『回想録』には次のような記述がある。「性愛同志になった女性の運命に私は魅力を感じなかった。引っかけられ，捨てられて，彼女たちは男から男へと引き渡された。彼女たちは赤ん坊を引きずっていた。……私がめざしている将来は

こんなものではなかった[19]」。

セクシュアリティをめぐるアナキストたちの議論が単なる抽象論やユートピア願望にすぎなかったとは言えないだろうが，現存の性差別的社会経済構造の中に置かれた女性にとって，あまりにも他人事的であり，危険すぎた。そこに賭けられるのは，女性の孕みうる身体そのものだったからである。女性の性欲をはっきりと肯定しつつも，ペルティエは現状では「わたしは結婚しないだろうし，おそらく愛人をもつこともないであろう[20]」と書き，生涯独身を貫いている。

セクシュアリティに関して，最後にホモセクシュアルな関係に対するアナキストの態度に触れておこう。「愛」の項目では同性愛に対する法的，宗教的な禁止に言及しながら，「アナキストはこの領域においては各人の個人的な嗜好に従う。アナキストは多様な無害な——現実の誰にも被害を与えないという意味で——嗜好を責めることは決してない」(50頁)としており，また「性道徳」の項でも「性的な問題は，個人的な問題であり，この領域での自由は絶対的なもの」(2577頁)と書いている。「個人性」「自由」を提唱するアナキズムが，セクシュアリティの領域で一つの基準を強いることは，理論上不可能であっただろう。しかし，実際の個々のアナキストがホモセクシュアリティを受容したかどうかは別である。そしてまた，彼らの「各人が好きなように」の主張が「異性愛主義」に無自覚であることも論を待たない。

(5) 性の境界をめぐって

以上見てきたように，セクシュアリティや結婚・家族などに関するアナキストたちの主張は，明らかに，当時の国家や教会が前提し，あるいは理想化しようとした女性像を打ち破るものである。家父長的権威と性別役割分業にもとづく秩序に対して，身体とセクシュアリティにまで踏み込んだところから，「個人性」の主張によって対抗しようとするアナキストは，自ら個人として向き合う他の性の身体やセクシュアリティの問題に直面せざるをえなかったからである。

しかし，アナキストたちの「個人性」，その多様なあり方（「自由」）の主張は，「性の境界」を超えるものではなかった。長くなるが「フェミニズム」の項のマレスタンの主張を引用しよう。

「フェミニストの活動家の中には，服装だけでなく悪弊や汚さに至るまで男性のまねをしようとする者がいるが，彼女たちが陥っている（理論上というより）事実上のマスキュリニズムほど，合理的に理解されるフェミニズムに対して害を及ぼすものはない。このような態度は女性を利するものではなく，反対に男性を褒め称えるものでしかない。彼女たちは女性の味方だと言いつつ女性を嫌悪し，男性を非難しつつ男性でないことを残念がっているだけのように見える。

真のフェミニストとは，女性本来の特性や魅力を熱愛し，人類の運命における女性性の重要さを確信しているがゆえに，それらが消滅して奇妙なハイブリッドな新人種が生まれることを願うことなど，到底ありえない。両性の平等を願うことは，一般の幸福のために等しく必要な両性における相補的な美徳を承認することである。それは，一方を他方に優越させることなく，両者を発展させようとすることである」(805頁)。

明らかに批判されているのは，ペルティエ本人である。先に述べたように「媚態」としての「女らしさ」を否定するペルティエは，女性の装飾的な服装それ自体が性的奴隷の表象であると考え，男装を試み続けたのである[21]。このようなペルティエの「性の境界侵犯」は，個人的生と性の自由を主張し，権力・権威的な社会がつくり出す隷属的な女性のあり方を批判するアナキズムにおいてさえ，決して容認されなかった。「男性／女性」の境界は「自然」であり，アナキストが求めたものは新しい形の「相補性」にすぎなかったのである。

おわりに

権利要求に留まらず，性的身体の自由を主張し，家族の解体を求めるペルティエのフェミニズムは，その過激なふるまいとともに，社会主義者の間でも，フェミニストの間でさえ嫌われ異端視された。そのペルティエに対して，異議や批判を向けつつも，多くの思索と執筆機会を提供したのがアナキズムであった。ペルティエの方では，アリア・リーへの手紙（1921年5月1日付）で「他に投稿できる新聞がなかったので，『ル・リベルテール』への寄稿を引き受けました[22]」と書き，アナキズムとは主要なポイント（国家権力の問題）で意見を異にすることを明言しながら，生涯のほとんどの時期においてアナキストと接点を持ち続けた。それはある部分，書くチャンスを求めるペルティエと，書き手を求めるアナキストとの単なる利用し合いだと言えなくはない。

しかし，以上で見てきたように，そこにはいわゆる「政治経済理論」から排除されがちな「性」の問題を，支配・従属の問題としてとらえ論じようとするアナキストとペルティエの共通した姿勢が見られる。ある意味で「個人的なことは政治的なこと」という第二波フェミニズムのテーゼが，アナキストたちのセクシュアリティや結婚・家族の議論に先取り的に組み込まれており，それがペルティエのようなフェミニストの問題関心と重なったと思われる。

もちろん「他人事」として女性の被抑圧状況を論述しうる男性アナキストと，その状況を自ら生き抜かなければならない女性，フェミニストとの隔たりは大きかった。「女性／男性」の境界線引きの権力作用に無自覚のまま，「個人性」の名の下に「自然の女性」を引き

込むアナキストに，ペルティエは胡散臭さを感じていたように思われる。もっともそのペルティエにおいてさえ，女性の「男性化」の主張によって「女性／男性」構造が解体されることはないこと，すなわち「女性」カテゴリーだけを消滅させることはできないことは理解されていなかった。

とはいえ，今日のフェミニズムの到達から20世紀初頭のアナキストたちの議論を切って捨てることが重要なわけではない。経済問題に還元されえない性支配の根深さに目を向けようとしたアナキズムとそこにおけるフェミニストの位置に関する検討は，さらに丁寧な調査と考察を必要としている。アナキスト紙誌における議論等を含め，今後の検討課題としたい。

注釈

(1) フランスのアナキスト研究としては河野健二編『プルードン研究』岩波書店，1974年などが古典としてあり，またサンディカリズムについては喜安　朗『革命的サンディカリズム』河出書房新社，1972年，谷川　稔『フランス社会運動史　アソシアシオンとサンディカリスム』山川出版社，1983年などがある。

(2) Maitron, J., *Le mouvement anarchiste en France, I, II,* F. Maspero, 1975 (Gallimard, 1992). ミシェル以外にM．ヴェルネ，J．ユンベールへの言及があるが，ペルティエはまったく無視されている。

(3) 日本の代表的な研究としては，水田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房，1979年（ちくま学芸文庫，1994年）がある。フランス・アナキズムとフェミニズムに関しては，本稿が扱うより少し前の時期を考察した Dhavernas, M. -J., Anarchisme et féminisme à la Belle Epoque. Quelques réflexions sur les contradictions du patriacat en milieu libertaire à la fin du XIXe siècle et au début du XXe (1) (2), *la Revue d'en face,* no. 12, no. 13 (1982), pp. 49-61, pp. 61-80 が出されて以来，ほとんど論じられてこなかったが，近年になって次の論考が出ている。Kerignard, S., Essai d'identification de la femme anarchiste. Le role des femmes dans l'anarchisme (XIXe -XXe siecle). *L'anarchisme a-t-il un avenir? Histoire de femmes, d'hommes et de leurs imaginaires. Colloque international, Toulouse, 27-28-29 octobre 1999,* Atelier de création libertaire, 2001, pp. 453-466.

(4) 拙稿「女の労働権—第三共和政下のフェミニストの主張—」愛知教育大学ヨーロッパ文化選修『ヨーロッパ』第8号（1996）49-67頁，同「M・ペルティエ（M. Pelletier）における個人主義と女性参政権の主張～第一波フランス・フェミニズムのなかの『過激分子』～」財団法人東海ジェンダー研究所『ジェンダー研究』第3号（2000年），41-54頁，同「マドレーヌ・ペルティエにおけるロシア革命への夢と挫折—20世紀初頭フランスのラディカル派フェミニストと社会主義の交差—」中央大学『経済論纂』第42巻第6号（2002年）81-101頁。

(5) *Encyclopédie anarchiste,* 4v., Librairie internationale, 1934.

(6) *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français Le maitron,* Les Éditions de l'atelier, CD-Rom, 1997.

(7) Lewin, R., *Sébastien Faure et 《La Ruche》 ou l'Éducation libertaire,* Edition Ivan Davy, 1989, p. 205.

(8) *Encyclopédie anarchiste,* Préface, p. 2-4.

(9) 項目数は大項目（ゴシック）のみを数え，人名はイニシアルのみのものは含めず，署名のみを数えている。

(10) *Encyclopédie anarchiste,* Préface, p. 4.

(11) Sowerwine, Ch. et Cl. Maignien, *Madeleine Pelletier. Une Féministe dans l'arène politique,* Les Éditions ouvrières, 1992, p. 192.

(12) Doctoress Pelletier: A Memoirs of a feminist, April 1933, Gordon, F. and Cross, M., *Early French Feminisms, 1830-1940, A Passion for Liberty,* Edward Elgar, 1996, p. 235.

(13) Sowerwine, Ch. et Cl. Maignien, *op. cit.,* p. 23.

(14) この新聞1923-36年はフランス国立図書館にマイクロフィルムの形で所蔵されている。

(15) フリーメーソンとペルティエの関係については現在「フランス第三共和政下のフリーメーソンとフェミニズム～マドレーヌ・ペルティエのフェミニスト戦略を中心に～」としてまとめている。

(16) 拙稿「M・ペルティエ（M. Pelletier）における個人主義と女性参政権の主張」。

(17) Dhavernas, M. -J., *op. cit.* (2), pp. 61-64.

(18) ペルティエは女性に対する幼少からの教育を変えるべきだとして，「娘の教育」を執筆している。*Madeleine Pelletier: L'éducation féministe des filles* (Préface et notes Maignen, C.), Syros, 1978.

(19) Doctoress Pelletier: A Memoirs of a feminist, *op. cit.,* p. 237.

(20) Sowerwine, Ch. et Cl. Maignien, *op. cit.,* p. 113.

(21) ペルティエの男装についての考察として以下を参照。Bard, Ch., La virilisation des femmes et l'égalité des sexes, *Madeleine Pelletier (1874-1939): Logique et infortunes d'un combat pour l'égalité,* Côté-femmes éditions, 1992, pp. 91-108.

(22) Sowerwine, Ch. et Cl. Maignien, *op. cit.,* p. 127.

（平成16年9月17日受理）